



動物レスキュー通信

2015年3月 第22号 (平成27年3月1日発行)

発行元
一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく) : 詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

ペット保険について考える



最近、日本でもペット保険に加入する人口が増えてきました。その内容は通院、入院、手術にかかった費用の一部を保障するもので、割引タイプと給付タイプの2種類に分けられます。しかし年齢や種類、健康状態などの加入条件によって加入できない場合もあります。徐々に加入できる範囲は広がっています。例えば、カバーしきれない広がりがあります。そして日本のペット保険加入率は4%と非常に低いのです。世界でもっともペット保険加入率はどこだと思いますか？ 答えはスウェーデン。スウェーデンでは犬を飼っている世帯の78.4%がペット保険に加入しています。しかしスウェーデンは決して犬だらけの国だということではなく、犬を飼っている人の多くが保険に加入している、つまり一度家族として迎え入れた犬には全てにおいてきちんと対応できるように備え、責任を持つという事のできる為に保険に加入しているという事なのです。日本と違い、スウェーデンでのペット保険はとも歴史が古く、100年以上も前から「動物保険」というものが存在し、当時は牛や馬などの家畜の保険でした。その後、犬や羊などが保険対象動物となり、1960年代からは現在のペット保険として大きく成長したのです。スウェーデンでペット保険が広く普及した理由として、「法律で犬や猫の店頭販売が禁止されている」事が関係しています。要するに犬や猫を手に入れる場合はブリーダーから直接手に入るしか出来ないという事です。ですからスウェーデンのペット保険には飼い主に向

けの保険があるのです。このブリーダー保険に加入しているブリーダーの元で生まれた子犬、子ネコたちは、生まれた時から保険によって守られていて、新しい飼い主さんは、このブリーダーから子犬、子ネコを譲り受けた時点でその保険を引き継ぐことが出来るのです。もちろん引き継がない人もいます。ですが、ブリーダーから犬の為、飼い主さんの為にと保険の引き継ぎを勧められれば、新しい飼い主さんも飼い主として命を引き受けるのだという責任を感じる事が出来るようになるはず。ベトナムに新しい飼い主さんが保険を引き継いだからと言ってブリーダーにマーキングが入る訳ではありません。この様な流れによってスウェーデンでは「犬猫と暮らし始めるには、ペット保険に加入するもの」という事が常識のように定着しているのです。又、日本とは違ってスウェーデンのペット保険には医療費をカバーするものと生命をカバーするもの2種類があります。もちろん2つを組み合わせる事も可能です。この医療費をカバーする保険には警察権、災害救助犬などの職業犬が病気やケガなどで元の職業に戻れなくなつた際に生命保険と同額の保障が受けられるオプションもあります。そして私が以前から考えていたオプションがスウェーデンにはありました。それが「安心ペットの世話保険」、これは飼い主さんが病気などの為に犬や猫のお世話が一時的に出来なくなつた場合に、動物病院やペットホテルなどの第三者に預ける為にかけた費用を補ってしてくれるのです。

スウェーデンのペット保険の掛け金は動物の種類によって異なる事は当然ですが、それだけではなく同じ種類でも居住地域などによっても変わってくるのです。掛け金の設定は独自の様々な統計結果から導かれていて、その統計を得るために動物病院、ケネルクラブと提携している事も大きな特徴だと言えます。動物病院やケネルクラブでもその統計結果を繁殖に生かす事ができ、その犬が飼い主の元に行くといった好循環が生まれるので、提携関係がある事によって、ペット保険の仕組みがペット医療全体の向上や疾病研究、健康維持などの役割を果たしていると言えるはず。詩月財団はこのスウェーデンで採用されているオプションを是非、日本のペット保険にも導入して欲しいと強く願っています。そしてこのオプション導入が実現した後は、保険加入の飼い主さんが亡くなつてしまった場合は、残されてしまった犬や猫を次の飼い主さんへと橋渡しできるような仕組みも構築したいと考えます。なぜなら、犬猫も飼い主さんも高齢化している日本でも、少しでも殺処分を減らすにはとても有効だと感じているからです。大切に飼われていた犬猫は、ほとんどの場合ある程度の歳を重ねているはず。それは言いかえると子犬、子ネコよりも寿命が短いという事。そして一人暮らしのお年寄りなど、自分の年齢の問題で犬猫と暮らす事を断念している方もいらっしゃる。こうした事情を持ち合わせた犬、猫とお年寄り等を繋ぐことによって人と動物が共に幸せになれるきっかけとなると確信しています。そしてそれは確実に犬猫の殺処分減少につながっていくはずなのです。(詩月)

ペット保険の普及と殺処分の関係性